



鼠の王

1月2日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月2日のおはなし「鼠の王」

ねずみ男が町にやってきたという噂を聞いた。噂を聞いた時点で町はすでに、ほぼねずみ男の手中に落ちていた。まったく迂闊なことにおれは、この町の護民官たるおれは、何も気づかないまま、なす術もなく町をあげ渡していた。“なす術もなく”というよりも、手を打つ暇もなく、気がついた時にはもう人心はもうねずみ男のものとなっていたのだ。つい数日前までおれの友人だったはずの人間がみな、ねずみ男を指導者と仰ぎ、偶像とあがめていたのだ。

いまから思い返せば、確かにそれに先立って奇妙なことはいろいろあった。だったらもっと早く気がついて良さそうなものなのだが、奇妙とは言え、どちらかというところ、“良い出来事”ばかりだったので、特に怪しみもせず、珍しいこともあるもんだな、くらいにしか考えていなかったのだ。“良い出来事”というのも、そんなに特別なことでもない。いつも不機嫌なソジュワデのかみさんがやけに愛想がいいとか、ケサダのところの悪ガキどもが妙に礼儀正しいとか、そのくらいのことだ。

2、3日前、畑を荒らしたやつがいるから調べてほしいと、ウルワギに呼ばれて出かけた時も奇妙と言えど奇妙だった。

「やあ、きてくれたんだね」

ウルワギが言った。おれは少し目を細めてウルワギを見つめた。

「ああ。お前に呼ばれたからな」

「ありがとう。嬉しいよ」

おれはちょっとまわりを見回した。これは何かの冗談で、おれたちを見ながら笑っている奴らがいるんじゃないかと思ったからだ。ウルワギがこんなしゃべり方をするなんてヘンだ。けれども、畑のまわりには誰もいなかった。わずかに3、4羽のカラスが、何か落ちているものはないか探しているばかりだった。

「仕事だからな」おれは用心深く返事した。「来ただけで感謝されたのは初めてだよ」

そもそもウルワギというのは気の短い暴れん坊で、畑を荒らされたなんて言おうものなら、いつも護民官のおれに連絡するより先に、町の酒場に突進して行って片っ端から「おまえが畑を荒らしたのか！」なんて、からんで回ったはずだ。そして、だいたい喧嘩騒ぎを起こして、それでようやくおれの耳に入るというのが常だった。それが騒ぎも起こさずおれに連絡してきたところからして、そもそも奇妙と言えど奇妙だった。

「要するにとっつかまえて、お前の前に引き出せばいいんだな？」

「うん、まあ」ウルワギが煮え切らない表情で答える。そしてハハッ！というような、奇妙な短い笑い声を立てたかと思うとこう言ったものだ。「仲良くできればいいな、と思うんだ。友達からもものを盗んだりするやつはいないだろう？ そう。友達になりたいんだ」

おれはウルワギを睨みつけた。ウルワギは見たこともないような満足げな微笑みを浮かべている。何か変なものを食べたりしないかと尋ねたが、ウルワギは特に気分を害した様子もなく、大丈夫だと答えた。町の東のはずれのゲゾの森には、食べると人を幸せな気分にしたまま死に至らせるキノコがある。それを食べたやつはちょうどこんな感じになる。やたらハッピーで、やたら前向きで。

結局ウルワギの畑を荒らしたやつが誰かはわからないままだった。けれど、それと似たようなことが何回か続いた。車を接触した奴らが、妙に機嫌良く自分の非を認め合って、最終的には仲良く別れていった。酒場から大騒ぎが聞こえたので、飛び込んでいったら、カベラの子ども達が出し物をやって、やんやの喝采をあびているのだった。いつもなら出し物を演じきる前に叩き出されていてもおかしくないのに。

昔からこの町に暮らして、どんよりした顔ながらも喧嘩したり罵り合ったり、それなりに楽し

くやってきた奴らが、急にやり方を変えてしまった。みんな毒キノコかサボテンでも口にしてみたいに目をキラキラさせて、互いをほめ合うのだ。怒ったり悲しんだりグチったりするはずのところを、褒め合ったり慰め合った励まし合ったりするのだ。冷静に考えたら正常なはずがなかったのだ。

けれど、そういう出来事をおれは見落としていた。単に気候のせいだと思っていたのだ。気候が良くなってきたせいだと。命の気配もない乾期が過ぎ、じめじめした雨期に入る前の、東の間の爽やかな気候が、みんなの機嫌を良くしているのだと思い込んでいた。でも実はそうではなかった。すべてねずみ男の仕業だったのだ。ねずみ男が、町の男たちを骨抜きにし、町の女たちをたらしこんでしまったのだ。

そんな時にねずみ男の噂を耳にした。ねずみ男が現れた町でどんなことが起こるかについて。それはまさにいま、護民官たるおれが守っているこの町に起こっていることとぴったり同じだった。そこに及んでようやくおれは悟った。この町にもねずみ男が入り込んだのだ。町の人間の心をつまえてしまったのだ。ねずみ男とは一体何者だ？ 新興宗教の教祖タイプに違いない。何とかしなくては。

遅ればせながら、あわてておれはいろいろ調べてみた。おれは知らなかったが、ねずみ男は大層な有名人（動物？）だった。ねずみ男は映画にも出演したことがあった。外見はそう見えませんが、実際には大層な年寄りらしい。ふだんは何人（何匹というべきか？）かの仲間と行動することも多いが、一人で独自の行動をすることも多いらしい。妖術を使うことができ。どこかにその妖術で支配する王国を持っているらしい。おれは自分の住み慣れた町が変わっていくのが許せなくて、ねずみ男に直接対決を挑むことにした。他の奴らは籠絡されても、おれはだまされない。化けの皮を剥がしてやる。

* * *

「やあ、来てくれたんだね」ねずみ男は開口一番、ウルワギと同じことを言った。正確にはウルワギがねずみ男のマネをしていたのだろう。「キミに会えて嬉しいよ。どうもありがとう。ハハッ！」

奇妙な笑い声を上げると手を差し伸べてきた。白い手袋をしている。この町で手袋をしているやつなんかいない。おれは不信の目を向けながら、なんとか握手をした。ねずみ男はおれの予想に反して、あまり宗教的カリスマは持ち合わせていないように見えた。けれどその人懐っこい笑顔と、映画スターならではのオーラは確かにあった。

「ようこそ、夢と魔法の国へ！ さあ、キミも一緒に楽しんでね！ ハハッ！」

案内されたねずみ男の家はいろいろな仕掛けに満ちていて、飽きることがなかった。清潔で、心引き立つ音楽が流れていて、楽しい驚きがいっぱいだった。そして細かい気遣いを受けて、快適な時間を過ごすうち、おれは自分の疑念が恥ずかしくなっていた。おれは子どものとき以来たくさん笑い、子どものとき以来ハラハラドキドキした。気がついたらおれはみんなの歌声に包まれて行進していた。

「ぼっくらっの、クッラブッの、リーダーは……」

「どうだい、楽しいだろう？ ハハッ！」

ねずみ男が振り向いて言った。

おれはニコニコしてうなずいた。

（「ねずみ男」 ordered by カウチ犬-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

鼠の王

<http://p.booklog.jp/book/41550>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41550>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41550>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.